

# 大序のことば

文樂座が春と共に更生して新粧の劇場に蓋を明けるのをきつかけに、記念として「文樂今昔譚」を綴つた。

大師は弘法に与られた格で、題名の「文樂」は、一般世間に通用してゐる「人形淨瑠璃」の廣い意味での代名詞として用ひた。

言ふまでもなく文樂座の誕生はさのみ古くはない、それ以前には竹本座豊竹座が控へてゐる、その竹本座を創めた革命兒義太夫から筆を起して現在の文樂座に至る、二百五十餘年間の今昔物語である。

豫てから淨瑠璃史を編む可く大半の草稿は筐底に收めてあつたが、それを土臺として今度は、わざと淨瑠璃史とか文樂座史とか云つた堅くるしい紋服は脱いで捨て、打くつろいだ所謂「義太股引」式な、大衆的興味的側面觀から扱ふことにした。

本書の資料、殊に文献に乏しい近代淨瑠璃史料は、主として家傳の文書、先考の記録古老の直話、私の幼時からの實際見聞から得たものであり、また挿入寫眞の大部分も殆ど自分の所藏ばかりで按配したのであるから、まことに井蛙の誹りは免れ得まい、遺漏過誤、不完全は豫め謝して置かねばならない。

太夫三味線人形等、然る可き人であつて記述に洩れた者もあらう、又、文樂以外の各

座に付てはわざと省筆した事などは、本書が嚴正な史的編纂ではない事、假に文樂本位の立場である事に由つて、諒された。

要するに貧弱な本書は、興味的讀み物として捧げたものに過ぎないが、その間一脈の淨瑠璃史文樂座史の傍が偲ばれるれば望外の悦びであり、世間に未だ此種の活字が現はれて居なかつたことすれば、まづい乍らも『露はらひ』としての一役を果たした譯で、それだけでも本懐である。

終りに本書の成るに就て特筆す可きは、終始多大の援助を與へられた松竹土地建物興業株式會社の日比繁治郎氏の厚情で、私は恰も多事多忙の際にて文作方面に關して殆ど同氏の手を煩はしたことは眞に感銘の外はない。又編輯出版に就ては同社の鳥江鍊也氏吉野榮二郎氏新玉勝吉氏成山桂三氏大橋照夫氏山崎利雄氏田中牛耳郎氏等の一方ならぬ助力を得たことは感謝に堪ぬ。尙ほ貴重の資料を貸與された中村鴈治郎氏豊竹古靱太夫氏長谷川貞信氏同小信氏に對しては厚く感謝の意を表す。

昭和四年十二月初旬